

三重県で発掘されたゾウの化石

【2種類の象;シンシュウゾウとアケボノゾウ】

今から、300～400万年前、今の名古屋市を中心として琵琶湖の約6倍もある大きな淡水の湖があった。この湖を東海湖と呼び、ここに堆積した地層を奄芸層群^{あげ}という。この奄芸層群^{あげ}から2種類のゾウが発掘された。奄芸層群の黒田層と亀山層から発掘されたシンシュウゾウと、藤原町で発見されたアケボノゾウである。両方とも、ステゴドン属に入る。

【シンシュウゾウ】

ステゴドン属は、第三紀鮮新世～更新世にかけて、東南アジアやアフリカを中心に繁栄した旧象の一群である。シンシュウゾウは約350万年前にすんでいた象である。1955年安芸郡河芸町の黒田層から、臼歯（上下4本そろったもの）が発見され、1977年には、亀山市住山町の亀山層から、門歯（牙）が発見された。この門歯は、欠けている部分を含めると牙の長さは2.2mとなり、肩の高さは3mと推定される巨大な象である。（両方とも、津市の県立博物館にて展示）

【アケボノゾウ】

アケボノゾウの化石が発見されたのは、奄芸層群の上部に属する大泉層（第三紀鮮新世末期）からである。1939年員弁郡笠田大池で桑名中学の中学生だった2人の生徒によって、アケボノゾウの臼歯の化石が発見された。その化石は第二次世界大戦で戦火にあって、今は計測値だけ残る幻の化石となってしまった。

また、1951年～1957年にわたり、員弁郡藤原町上之山田で、ほぼ全骨格に近いアケボノゾウの化石が見つかり、現在、津市の県立博物館に展示されている。その他、中里小学校、藤原中学校、藤原岳自然科学館のも、それぞれ門歯、または臼歯が保存されている。同じ地層から、当時の環境を知る手がかりとなる植物化石（オオバタグルミの堅果、アベマキの殻斗、カシワの葉、エゴノキの種子、メタセコイヤの球果）や淡水産貝化石（タニシ、ドブガイ、クリスタイア、イシガイ、カワニナ）も見つかっている。

なお、オオバタグルミは、員弁郡で発見されたのが最初でアメリカのチェニー博士が名づけ親である。従来のものに比べて、特別大型であったことから名づけられた。

三重県下では、アケボノゾウが産した地層と同じ地層から、ニッポンムカシジカの化石も見つかっている。

アケボノゾウの仲間の化石が、ビルマや東南アジアでも発見されていることから、大陸と陸続きの時代に日本にわたってきたことがわかる。当時、日本は象にとって食べ物^{エサ}が豊かで暖かかったと考えられる。また、アケボノゾウが発見された地層から産した植物化石（特に、メタセコイヤ）から、当時、日本（三重県）は大森林におおわれていたとも考えられる。というのは、メタセコイヤは大木に成長するからである。これは第三紀に繁茂し、現在にも残っているので「生きている化石」とも呼ばれている。

なお、メタセコイヤは明正中学校の中庭に植えられており、私たちも見ることができる。